

でとり行った。併せて、清津、羅南その他北朝鮮の地で無念の死を遂げられました方々の冥福をも、心からお祈り申し上げた。昭和二十年八月十三日、北朝鮮の羅南から避難民として九カ月の避難行の末、着のみ着のまま日本に帰り着いたのが、二十一年五月の終わり。その母も九十五歳の天寿を全うした。

私は父母のお墓を鄭重に護っていきます。

あかい夕日

大分県 波多野 保子

一 両親の出会い

父は、埼玉県の農家の次男として、明治二十七年（一八九四）年一月に出生、母は、京城（ソウル）で雑貨商を営む家の、次女として明治三十八年十月に出生した。

血気盛んな青年だった父は左翼思想にかぶれて

いて、口うるさい田舎では住みづらく、次男という身軽さもあって日本を脱出した。アジア各地を点々と放浪し青春を謳歌していたが、台湾でマリアにかかり止むなく一時帰国したものの、回復後はすぐに京城へと居を移し、いろいろな仕事を経験していたらしいが、やがて新聞記者となり、水を得た魚のように各地を走りまわっていた。

そんな折、京城で弁護士をしていた母方の叔父の紹介で母と結婚することになった。

何ひとつとして不自由なく育てられた母は、貧乏には程遠い生活をしていて、茶道、華道、行儀作法、それに当時としては珍しいテニスなどをするハイカラさんだったようだ。金もなく、ただひたすら自分の道を歩き続けていた父に、何故について行ったのかは不可解である。愚痴も言わずにひたすら父に寄りそい、この地に骨を埋めると決意した父母の生活は、雨の中、長男を背中におんぶしての新聞配達でスタートしたが、それからは新聞販売店、書店、スポーツ用品店などだんだん

と事業を拡大していった。

昭和十二（一九三七）年に私が生まれたころには、京城の市街は活気に満ち満ちていて、在満日本人の中でも父は中心的な存在になっていた。繁栄をしていた日本人街でも、日暮れになると時折馬賊が出没していて、治安はまだまだ不安定であった。大阪朝日新聞の間島支局長であった父は、そんな記事をどんと内地へと送っていたと母に聞いたことがある。向学心のある韓国人の青年には、新聞配達をさせ、学校へ通わせていた。その人たちに、「目標を持ち人生を見定めよ」と、毎朝訓話をしていた。仕事にも従業員に対してもとても厳しい父だったが、夕方になると、近所の子供たちを集めては、いろいろな遊びを教えてくださいました。その中でも今でも印象に残っていることは、芝居っ気たっぷりに紙芝居をしてくれたことだ。

私には、三人の兄と、私の下には一人の妹と弟がいた。兄たちにはとても厳格な父だったが、お

てんばだった私には目がなかった。店内は勿論のこと、書庫、倉庫、地下室もあって、遊び場には困らなかった。小学生だった三番目の兄が登校すると、待つてましたとばかりに仲良しの近所の男の子を集めては、兄が大切にしている鉄かぶと、おもちゃの銃剣を持ち出して兵隊ごっこに熱中していた。両親からは口ぐせのように、満人街には行かないようにと言われていたが、しょっちゅう言われているとなおのこと興味津々となり、探検隊を編成して足を運んだものだった。

子供心にも、満人街の銭湯は異様に思えた。夏は暑いので銭湯の扉は開放され、大勢の太ったおじさんたちが、腰にタオルを巻き、湯気のモウモウと立ちこめるロビーの椅子に腰掛けて、酒を飲んだり、マッサージしてもらっていたりで、実にゆったりとくつろいでいたのが見られたが、その様子は初めて知るものだった。私の父は、昼間に入浴したり、酒を飲んだりはしないので、まるで別世界のようなだと感じた。

二 日本の敗戦

昭和二十年八月十五日、日本は無条件降伏をした。京城はこの日もきれいな夏空の朝やけで夜が明けた。私には、いつものように、楽しい一日が始まるはずだった。が、店内のあちらこちらでは従業員の人たちが顔をくもらせ、ひそひそと立ち話をしていた。電話もひっきりなしに鳴っていて、受話器をとった父は深刻な顔付きで応対していた。

翌十六日になって父は、在留日本人を国民学校の校庭に集めて、日本人として今後とるべき道を協議することになった。しかし、集まった人々の中に憲兵や軍の関係者がいて、「敗戦はデマだ」と叫んで父の話を阻止しようとしたが、父は断固たる態度で、「これは正確な情報である。日本が無条件降伏したからには、憲兵隊も、軍隊も、言論行動を阻止することはできない」と、言いきっていた。

帰宅した父は、二振りの日本刀を前にして、母

と激しく口論していた。初めて目にする父母の言い争いであり、事の重大さが子供である私にもひしひしと感じられた。父は、「これからは治安も乱れ、女、子供の命も危ない。子供は父が切り、すべての処理が終った時点で、夫婦で自決しよう」という意見だったと思う。しかし母は、「罪のない子供たちの命を断つことは私にはできない。自分の命に替えても内地へ連れて帰る」と主張していたようだった。また、さらにつけ加えて「今なら列車も動いているから、家族揃って内地へ帰ろう」とも提案していたようだったが、父は、「おれは日本男子だ。在満日本人を見捨てて家族を連れてこっそりと逃げ帰ることはできない！」と、声を荒げて言いきっていた。

当時、大阪朝日新聞の支局長だった父のもとには、明確な情報がいろいろと入っていたようだった。集会を阻止しようとした憲兵隊員や軍の関係者は、その日のうちにどこに行ったのかは分からないが姿を消していた。

十七日になると京城市街の様子が一変した。日本人は外出禁止となり、朝鮮共産党員が肩で風を切り市街の巡回を始めた。やがてソ連軍も進駐して来て街中は騒然となってきた。在留日本人は手早く荷物をまとめて、少しでも安全な場所へ移ることにになり、夜になって行動することになった。私たち一家も、お隣の朝鮮の方に留守を頼み、父の友人宅へ避難した。避難時の家族構成は、父母と、三番目の兄と私、そして妹と弟の六人であった。

真夏の日差しは強烈で麦藁帽子を通し、容赦なく照りつける暑い暑い一日だった。父と兄と私は、大好きなトウモロコシ畑に入った。父と兄は汗を流しながら作業をしていたが、私は相変わらず勝手な遊びをしていて汗びっしょりとなった。するとそのとき畑の中を、肩と胸にいっぱいのお刺をつけた朝鮮共産党員とソ連兵が、自動小銃を持ち、一方ではサーベルをも下げて、それをがちゃがちゃと鳴らしながら近づいて来た。赤ら顔

の朝鮮共産党の隊長とも思える人物が、流暢な日本語で父にこう告げていた。「あなたを、水源地に毒を投入した容疑で、逮捕します」と、一方的にしゃべっていた。

母が、事情を察して家の中からとび出して来た。父が隊長に、「着替えをしたい」と言って歩き出すと、ソ連兵は、父が逃げるのではないかとばかりに銃をかまえたが、父はそれには構わずに家の中に入り、いそいで身支度をして再び出て来た。逮捕に来たメンバーの一人が父に縄をかけようとしたそのとき、父はきつとした顔で相手を見すえ、「そんな必要はない!」と、語気を荒くして言って、次いで今度は落ち着いた声で、「母さん! 子供たちのこと頼むぞ!」と言いながら母を見すえて、大丈夫だというように、大きくうなずき、勇然と胸を張り、堂々とトウモロコシ畑の道を一度も振り返らずに歩いて行った。これが私の見た父の最後の姿であった。

父の逮捕で母は身の危険を感じ、一たん我が家

に戻り、荷物をまとめることにした。隣の留守をお願いした朝鮮の方のおかげで、我が家はまだ無事であった。

かつての日本人街の住宅には、満人、朝鮮人などがいち早く入り込み、占拠して我がもの顔で生活をしてきた。以前に毎月妹と一緒に散髪に行つた本田理容店のご夫婦は、首をつつて自殺したといふことを聞かされたが、一方では侵入して来たソ連兵に奥さんが辱めを受けたからだ、ということも聞いた。

隣の朝鮮の家族から「子供さんが四人もいてはさぞ大変でしょう。元気な保子ちゃんだけでも預かりましょうか？」と言われたらしいが、母は断り、我が家をあとにした。あのときに、母が私を預けたら、今ごろは、残留孤児として、親兄弟を探すために来日していたかもしれない、と思うだけで恐ろしい気持ちになつてしまう。我が家を出て教員宿舎に身を寄せた。外出はおろかなこと、家の中で声をひそめていて、危険におびえる毎日

となつた。そんなころ旅順中学校の全面閉鎖で、二番目の兄が汽車を乗りつぎやっと帰つて来た。進駐して来たソ連兵は、朝鮮警備隊員に案内させて、邦人住宅に侵入し、暴行、略奪を繰り返していた。若い女性は、髪を切り男装をして顔にはすずを塗りつけて男のようになっていた。

三 飛行場跡に結集

在満の日本人を一日も早く日本に送還するといふ理由で、京城に残つていた日本人は飛行場跡に集められた。携行する荷物にも制限をしていて、個人で持てる程度の身の回り品だけに限られていた。飛行場に集合したが、そこには便所はもとよりのこと、炊事場も洗面所もなかった。日本に向けて出発するまでは全員この場所で生活するとの話になり、男性たちは防空壕の跡に穴を掘り、踏み板を渡し、入り口にはむしろを下げて、簡易便所を作つた。簡単な食事の支度もできるようにと、炊事場兼洗面所も用意された。組分けされた各世帯は、格納庫らしき建物の中に放置されてい

る各種の工作機械の間に体を入れて、寝泊りする
ことになった。子供心には、これは面白そうだと
胸をはずませたのも束の間、夜になるとソ連兵が
車で乗りつけて来た。格納庫の大きな鉄の扉が、
ぶきみな音をたててこじ開けられた。自動小銃を
構えたソ連兵の姿が月の光に照らされて、まるで
魔王のように壁にうつし出されていた。「ダワイ！
ダワイ！……？」と何事かを大声でわめ
きながら銃を乱射していた。人々は機械の下に身
をかくし、この恐ろしい時間が一刻も早く終わる
ことを祈っていたが、しかし、目ぼしい女性が見
つかるまでは、この光景が続いていたのだった。

翌朝になると連れて行かれた女性が、洋服をズ
タズタにされて放心状態のまま倒れこむようにし
て帰って来た。周囲の大人たちは、悲しげに目を
そらし、無言であった。子供心にも、「このお姉
さんは何かとても恐ろしい目に遭ったのだ」と直
感した。日頃かわいがってくれるお姉さんだが問
いかけることもできなかった。

毎夜くり返される悲鳴と怒声、「ギイッ」と
きしむ扉の音を決して私は忘れることができな
い。大人の人たちも何とかして助けたとは思っ
ていたのだろうが、手を出すと自動小銃で撃たれ
るので、どうすることもできずにただ目をそむけ
ているだけだった。なんと人の力の微々たること
かと痛切に感じるものだった。

四 東山に移動命令

なんの朗報もなく時は過ぎていったころ、東山
に移動せよとの命令が出た。全員、毎回の出来事
で疲れ切っていた。だが東山の収容所は板の間だ
が間仕切りがあった。食糧事情はいよいよ悪く、
高梁ゴリヤンにトウモロコシと、消化の悪いものばかり
の食事が一日二回支給された。年寄り、子供に病
人が出始めたが、元来が病弱だった妹はやせほそ
り、栄養失調から肺炎を併発し、なんの手だても
治療することもなく病死した。享年五歳だった。
そして妹を追いかけるように、弟も高熱を出して
すぐに亡くなってしまった。享年三歳であった。

母は、葉さえあればと悔やみ通していた。父と終戦の日に約束しながら、二人の子供を守りきれなかった事を嘆き、初めて肩をふるわせ泣いていた。周囲の家族にも次々と死人が出ていた。火葬もできず妹と弟は小さな箱に収められ土葬となった。母は詫びながら涙をこぼし土をかけた。

やがて、日本に帰れるとの情報が流れてきた。亡くなった身内の人を土葬にした家族は、せめて遺骨だけでも日本へ連れて帰ろうと、遺体を掘り起こして火葬にすることになった。凍てついた大地に鶴嘴を打ち込み、次々と棺を掘り起こして、それに薪を積み上げ、ガソリンをかけて火をはなった。簡易な木箱に入った細い妹の首が、ころりと体からもげて私の足もとにころがってきた。まるで生きているような表情の妹の首。ギョッとする私を気にすることもなく、近くにいた男性が妹の首をつまみ、炎の中へ放り込んだ。大人たちは終始無言で作業していたが、異臭の漂う中、炎に照らしだされた顔は、無表情であるだけにいや

がうえにも無気味で、とても恐ろしく、思わず母の手を握ったものだった。

だがすぐにでも引揚げが始まるという話はいつの間にか尻つぼみとなり、日本に帰れるという話は誰も口にしなくなっていた。持っている金品も、だんだんと底をつき、度重なる収容所の移転で、全員の顔は疲労と絶望感にさいなまれてきた。子供心にも、今日一日がどうなるのだろうかと不安でいっぱいだった。

悲惨な避難民生活は以前にも増してひどくなった。旅順より命からがら帰って来た二番目の兄は、大人たちにまじって自動車修理工場へ使役として働きに出掛けていた。三番目の兄と私は、菓子とたばこを仕入れて貰い、満人街へ売りに行くことになった。

まだ平和だったころ、探検隊となつて行った満人街の銭湯へと足を運んだ。銭湯内には、あのとぎと変わることもなく湯気が立ちこめるなかで、太った満人の大人たちが、腰にタオルを巻き、談

笑したり酒を呑んだりしていた。この場所だけは、時間が止まっているようにさえ感じられた。何日か経ったころ、満人街に行商に出た子供が戻って来ないという事件が起き、日本人の間では大騒動になった。それからは兄と私の細々とした営業活動は中止となった。

母は、配給された高粱とトウモロコシを細かく碎き、それに野菜を加えて作ったおかゆを売ってお金を稼いでいた。美しかった母の黒髪は真っ白になり、ほほはこけ落ちて、目だけがきらきらと輝いていた。残された二人の兄と私のために骨身を削って働く母であった。

五 まだ見ぬ祖国日本へ

いよいよ引揚列車が出ることになり、龍井駅より新京（長春）行きに乗せられた。列車といっても材木を積む無蓋車であった。危険だからと子供、女性、それに老人などを車の真ん中に座らせ、数少ない男性が荷物を守るように外側に並んで座った。列車はゴットン、ゴットンと動き出し

た。長かった収容所生活。子供心にも胸をなでおろしたが、そのときに先頭列車で悲鳴が起きた。見ると線路ぞいに、満人たちが棒の先にかぎ形の金具をつけ、車上のまわりに置いた荷物を次々に引っかけ奪っていった。そんな略奪が次々と繰り返されていったが、列車は一応順調に動いていた。

日が暮れてあたりはうす暗くなってきた。すると今度はスコールのような雨が降り始めて、心身ともに疲れ果てている人々の上に情け容赦なく叩きつけた。もちろん雨具も何もないので大人たちは大きな布を広げ、老人、子供を守ってくれた。やがて嘘のように雨が止むと、あたり一面を赤く照らして、地平線のかたに夕日が沈みだした。すると、どこかの貨車から、誰が歌っているのか分からないが「ギンギン、ギラギラ夕日が沈む、ギンギンギラギラ夕日が沈む、まっかっかっか空のくも、みんなのお顔もまっかっか、ギンギン、ギラギラ夕日が沈む……」という懐かしい童謡が流れしてきた。それを聞いていた私たちの貨車の人たち

もみんな歌い、やがて大合唱になった。大人も子供も沈みゆく夕日を見ながら歌っていた。大人の人たちの目からは、とめどもなく涙が流れていたのを覚えていた。

列車は気ままに走っていた。ゴットン、ゴットンとけだるい音をたてながら。こんな調子では本当に日本へ帰れるのかと、子供心にも不安がよぎっていた。突然列車は山の中で急停車した。すると前方の貨車から伝令がきた。物品の要求である。数少ない荷物の中から時計やネックレスなどを出す。すると列車は再び、何事もなかったかのように、ゆっくりと動き出した。今日が何月何日なのか、ここはどこなのか誰にも分からなくなっていた。

六 馬賊に追われる

列車はやがて、八路軍と国府軍の境界へたどりつき、全員はそこで降ろされた。ここから先は列車が動かないというのだ。老人、子供を連れての行軍である。だが、それに反発する者は誰もいな

い。反発することは死を迎えるということを誰でも分かっていたからだ。重い足を引きずりながら、必死で後に続いた。歩きながら、ふと、食事をしたかなと考えた。

そのとき、突然、山中で銃声がひびいた。人々の中に緊張が走る。私は母の手をしっかりと握った。水の音が聞こえる。山中は昼だというのに、うす暗い。「川だ！ 流れが早いぞ！ 流されるな！」と、誰かが叫ぶ。みんな必死である。母は下の兄と私を両脇にかかえて渡り始めた。背中のリュックは水を含み、母の足もとがよろける。不思議と恐怖感はなかった。ただ夢中で母にすがった。人のざわめきと激しい息づかいが伝わってきた。川の深さは大人の胸まであったと思う。ただ、そのときに妙にのどが乾いたのを覚えている。やっと岸にたどり着いた。全員ずぶぬれで、ボロ布のようにくたくたと、くずれるようにその場に座り込んでしまった。

すると再び銃声がこだました。馬のひずめの音

が聞こえた。奇声が聞こえた。よく見ると十数人の馬賊が馬に乗り、奇声をあげながら、銃を空に向け打ちならし、私たちの囲いをグルグルと威嚇しながら走っていた。手首から腕のつけ根まで腕時計をはめた者や、肩に赤や黄色の子供用の帯を、たすき状にかけている者もいた。みんなどこかで略奪したものでだろう。

やがて馬から降りた馬賊たちは、私たちを並べ、無抵抗の日本人をさげすむかのような様子で身体検査を始めた。次々と物品が略奪されていく。母は、これから先の事を考えて少しでも金を残そうと、私の靴の中へかくそうとした。しかし、前の方で隠したのがばれてとがめられ、老人、子供が銃身でなぐられている姿が目に入った。私はおびえてしまい、母の願いを拒否してしまった。いよいよ私たちの所へも馬賊の一人が近づいて来た。今はこればかりと観念した母は、全財産を差し出した。するとその馬賊は、きれいな日本語で「子供さんがいて、大変でしょう！」

と、言いながら母の差し出した金品をそのまま母の手に戻してくれたのである。突然の馬賊の行った行為に母はとまどい、啞然としてその人の顔を見つめていた。馬賊は母に目くばせをしていた。やつと事の次第を理解した母は、何度も何度も頭を下げた。私はこの情景を見て、つらいことばかり続いたこの避難行動の中にも、人種をこえた優しい人もいるのだと妙に感動したものだだった。

略奪を終えた馬賊の一群は、満足気だった様子で奇声をあげ、砂ぼこりをもうもうと立て、立ち去って行った。その一群の中にあの優しかった馬賊の人を見付けられなかったのが、子供心にも残念だった。

大切な品物を奪われた全員の足は、なお一層のこと重くなったが行進は続いた。辺りはすっかり暗くなっていた。「着いたぞー！」その声に目をこらすと、大きな建物が闇の中にあった。引率者が誰なのかは分からないまま、全員はただ黙って行動した。「早く階段を上って！ 早く！ 早く！ 早く！

く！」登りついた屋上に、全員へたり込んだ。

だが、すぐに階段の下で人のざわめきが聞こえた。みんな疲れ切っているのに神経はするどく、

物音におびえていた。全員が息をひそめる。下で人の気配がする。小声で指令がでた。「もしも上ってきたら、大声を出そう！」「その内に夜が明ける。頑張ろう！」「来たぞー」「わあっ、わあっ」全員で大声をあげる。足音が止まる。気配が止まる。朝まで何度繰り返ししたことだったか。本当に長い長い夜だった。

やっと東の空がしらんできた。周囲が確認できるようになり、人の気配もなくなっていた。体は疲れきり、自分が自分でなくなったような感覚であった。重い体を、足をひきずるように階段を下りて見ると、ここは駅舎で、線路もあり列車が停車していた。

再び無蓋車に乗せられ、長春、奉天（瀋陽）を経て乗船する葫蘆島へ着いた。列車に何日乗っていたのか、どんな所を通ったのか、あまり記憶に

ない。思えば、父と別れ、収容所を転々とし、何カ月目だったのだろう。あまりにも長い旅であった。

七 見渡すかぎり青い海

私たちの乗船した船は、日本の貨物船を改造した引揚第六便、「摂津丸」（九千七百六十トン）であった。生まれて初めて目にした海は、どこまでも広く、どこまでも青かった。乗り込んだ引揚者はハルビン組を加え、四千人ぐらいであった。

船旅はおだやかに始まったかに思えたが、幾多の困難を乗り越えた老人、子供が船の中で次々と死んでいった。毎朝、ござにくるまれた子供の遺体、老人の遺体がボートで降ろされて、人々が合掌すると海中に投げ入れられた。母船は悲しげに霧笛をボーッと鳴らし、その周囲を回っていた。

これが水葬というものであった。発疹チフスは、とどまるところを知らず次々と体の衰弱した人々の命を奪っていった。祖国の土を踏むこともなくあの世に旅出っていった人々のこと考えると、万

感胸に迫ってくるものがある。たかが数十人の馬賊にも立ち向かうことができず、日本人としてのプライドなどはすべて捨ててきたのであった。

撰津丸が佐世保の南風岬へ着いたのは、終戦から一年二カ月経った昭和二十一年十月であることを船中で知った。しかし本土を目前にして二週間係留されてしまった。船内で腸チフスが発生したので、数回の検便が実施され、やっと上陸が許された。身内の迎えもなのまま、DDTを頭からパンツの中にまで吹き込まれ、全身粉まみれであった。今まで笑うことさえも忘れていた大人たちも、ほっとしたのか声をあげて笑った。

八 父のふるさと埼玉県へ

父の生家には父の兄夫婦を中心に、その一族が住んでいると聞かされていた。外地で結婚した母は、一度も訪れた事のない埼玉であったが、それなりに成功していた父は、実家の方へも仕送りを続けていたようだった。

佐世保港からは二枚のはがきを埼玉県の父の兄

弟あてに出していたが、伯父の家からの迎えはなかった。もう一枚のはがきの宛先は父の弟の家であったが、父のところで長年働いていた人で、終戦の前に内地へ帰っていたその方が、叔父に頼まれて牛車を持って迎えに来てくれた。人家もまばらな田舎道を、ガッタン、ゴットンとゆられながら、柿の実、栗の実が実る道を進んだ。牛はときどき歩みをとめて、「ポトン、ポトン」と糞を落として、のんびりとして歩いていった。「奥さん、何もできなくてすみませんが、この家です」と、言葉少なに言って、私たちを降ろして別れて行った。

大きな藁ぶき屋根の家で、大きな牛が、牛舎で口をモグモグさせていた。

母を先頭に二人の兄と私は、それぞれのリュックサックを背負い、うす暗い土間へ入って行った。目を凝らすと、一人の老婆が藁打ちをしていた。眼鏡ごしにジロツと私たちを見て一言「とみこ！ 満州だべ！」と、吐きすてるように言った

まま、あとは私たちを無視し、再び藁打ちを続けていた。私たちは息を呑み、立ちつくしてしまった。「お世話になります」と、母は深々とおじぎをし、私たちも母の真似をして頭をさげた。

奥の方から小柄で人のよさそうな女性が出て来た。「満州のおばさん、長旅で疲れたべー。どうぞ！ どうぞ！」と言ったが、それはあたたかく優しい言葉であった。奥の座敷には、叔父が末期癌で病床に伏せていた。苦しい息の中から、父のことや引揚げの状況のことなどについて、涙を流しながら聞いてくれた。自分がこんな状態では何もしてやることができずに本当にすまない、と言って何度も何度も詫びていた。

土間で見かけた叔母の姿から、母はこの家では長居はできないと判断し、母の実兄夫婦が大阪に在住しているので訪ねると叔父に告げ、上の兄を連れて大阪へ旅立った。兄と私を叔母に頼み、心配気に出かけたが、叔母は母と兄が出て行くことづくに、私たちにつらく当たりだした。突然現れた

穀つぶしと考えたのだろう。田舎であるだけに三度の食事は与えられたが、八歳の私にはまるまると太った赤ん坊を一日中おんぶさせ、兄は背負いかごをつけ桑の葉つみをさせられた。

初日には母と全員一緒に広い座敷に寝かせてくれたのだが、母たちが大阪に向かった翌日から、かいこ部屋の通路で寝ることになった。養蚕が盛んな時期で幼虫は一晚中、バリ、バリと桑の葉を食べ続け、時折、グロテスクな幼虫が枕元にポタッと落ちてきた。一睡もせず朝を迎える日が多かった。しかし次の場面が待っていた。出された朝食のごはんを一口食べたところで恐怖が待っていた。芋に紛れて、かいこの幼虫が炊き込まれていた。「お兄ちゃん！」叔母は私の言葉に反応し、ジロツと見ていたままだった。失心寸前の私は兄に助けられて裏口へ出た。体がふるえて言葉も出なかった。小柄な兄は私の手をしっかりと握っていた。ふと柿の木ごしを見ると、朝焼けの富士山が見えた。この美しさが二人の悲しさを倍

増させ、二人は泣いた。

一週間後に叔父が亡くなり、母と上の兄も目的を果たせずに帰って来た。そして、一足先に京城から引き揚げている母の姉夫婦を頼って大分県へ行ってみる、と母は言い出した。ここにいれば食べることは困らないからだろうから、下の兄と私は埼玉県に居るようにと言われたが、食べられなくても良いから連れて行ってと二人で母に言い合った。母は事のすべてを察知したのか、来たときと同じ着のみ着のまま、元々のリュックサックを背に、追われるように埼玉県をあとにした。

九 大分県へ向かう

大分県に着いてからは、戦時中、軍の官舎だったという伯母の家での間借り生活がスタートした。近所の人々もほとんどの人が引揚者だった。伯母の家は、伯父が弁護士をしていて、比較的めぐまれた生活をしていた。一つの台所で、伯母の方は芋ごはん、我が家の方はこかす団子の食事であるだけに、母は私たちにずい分と気を使ったよ

うだ。

昭和二十三年、行方不明だった長兄が、旅順より引き揚げて来た。それを機に伯母の家を出て、やはり軍の兵舎であった長屋の一部屋に一家五人で生活することになった。長兄は大分の土建会社に、次兄は神戸の製鉄会社へと就職した。兄と私は一年繰り下げられて、小学校五年生と三年生に編入された。

当時、近所では朝鮮人が芋焼酎を作っていた。母は近所の友達と一緒に、その閩焼酎を水枕に入れ、法の目をかいくぐり大分市へ売りに行った。満州で生活していたころの母からは想像もつかない変身であり、実にたくましく生きていた。その日の内に現金が手に入り、日用品も徐々に買い揃えられた。しかし当時はまだ敗戦の傷跡が濃く、大分の駅前には閩屋さんで溢れていた。長兄はそんな母の姿を悲しげに見つめていたが、そんな折、母は知人の紹介で国立病院で請負の洗濯婦を募集していると聞き、迷わずこちらを選んだ。

戦時中の栄養失調で、結核患者が多く、国立病院はその隔離病棟となっていた。結核は別名肺病と呼ばれ、不治の病のように言われ社会的偏見があった時代である。

私は学校から帰ると病院へ迎えに行くのが唯一の楽しみだったが、母との約束で院内には決して入らないということになっていた。長い廊下のはずれで母を待った。白い割烹着姿の母は、両手いっぱい洗濯物を持ち、各病室の患者さんに手渡ししながら、私の方をチラッと見、手を上げながら近づいて来た。強い消毒液の臭いが院内に漂っていた。

十 母が倒れる

ささやかな幸せが、ほんの少しずつ我が家に近づいてきたと思った矢先、母の右足に異常が現れた。大した事ではないと強気で頑張っていたが、日に日に大腿部から膝の裏にかけ紫色に変色し始めた。診察の結果、悪性筋炎でこのまま放っておくとだんだんに転移すると診断され、大腿部の

つけ根から切断すると言われた。

私たちは動揺した。しかし現在のように保険もなく、不可能なことだった。兄は会社に金策を申し出た。そのとき、会社の同僚から「山中で秘伝の漢方薬を作っている山伏がいる。少々額は張るが右足を失うより良いのでは」と言われ、この漢方薬に賭けてみることにした。終戦で父を逮捕され、収容所で妹と弟を亡くした私にとって、母まで失うことはできないことで、絶対に完治させなければとの思いでいっぱいであった。会社での一日の仕事を終えた兄はすぐに列車に乗り、山中を歩き、山伏の許へ通った。山伏は「直る」と宣言してくれたが、生薬である為、兄は毎日山伏の許に行って薬を買い、夜中に帰って来た。

貯金も底をつき、会社での前借りと経済状態は最悪となった。だが、私たちを苦勞して内地まで連れて帰ってくれた母を助けたい一念で病氣と戦った。

十日程経ったある日、母がうめき声をあげた。

急いで布団をめくると、右ももの骨だけを残しどっと肉が崩れ落ちた。母はあまりの痛さに失神状態となっていた。ちょうど休みだった長兄は、少しも慌てることもなく、用意していた別の薬を取り出し、患部につけた。「お母さん！ 大丈夫だよ。悪い所は取れたよ。痛みもおさまるよ」やがて薬の回数も減り、骨に肉がつき始めた。まさに奇跡であった。

あのとき、入院して右足を切断していたらと、考えただけでもぞっとした。母は本当に強かった。リハビリに八カ月程かかったが、見事に完治した。

経済的には大変な状態だったが、私たちは負けなかった。振り出しに戻っただけなのだ。頑張ろうが合言葉になった。下の兄と約束した。母を喜ばすには、学業しかない……。

桜のつぼみもつき、小学校の卒業式で私は答辞を読み、兄は中学校で優等生代表になった。参列した母の目からは、優しい涙が流れていた。

十一 思い出

兄と私を通った中学校は、かつての陸軍の造兵廠の跡地だった。弾薬庫、防空壕もそのままの状態であり、体育館として使用した建物にはガラスもなく、板や厚紙を貼り、寒さをしのいでいた。ここにもまだ戦争の名残が現存していた。粗末な校舎の間を流れる小川には、おたまじゃくしが真黒な群をなし、おだやかな風情であった。

やがて私も県立高校へ、そして無事卒業し、就職、結婚した。夫は三男坊であったが、実母の面倒を見た。私は姑と三十二年間同居し、いろいろと葛藤もあったが、義母は最後まで私たちと同居し、他界した。そして、私の目の前からは母の姿が消えていった。

数年来、風邪の症状が抜けず、不審に思った兄と私は、大病院での精密検査を受けるように説得して連れて行くことになった。毎年のように撮っていたレントゲン写真を持って行った。すべての写真を重ねた時点で、医師は首をかしげた。「検

査して見なければ、はっきりした事は言えませんが、かなり進行しています」今まで通院した病院の誤診には腹立たしさがこみあげた。五カ月に及ぶ闘病の末、昭和五十六年三月、母は他界した。享年七十六歳。おりしも春の彼岸の入りであった。

終戦の翌日、子供たちを日本刀で切り、その後二人で自害しようとする提案した父を強く引きとめ、自分の命に替えても、必ず内地へ連れて帰ると父に約束した母。敗戦、引揚げ、そして極貧の生活をたくましく生き抜いた母。終戦後、ラジオから流れる尋ね人に耳を傾けていた母。生死不明、行方不明のまま、紙きれ一枚が入った遺骨箱をただ、黙って抱きしめていた母。どんな想いで他界したのかは、今となっては知る由もない。

私も一男二女の子供を持ち、四人の孫に囲まれた、つつがない日々であるが、何かにつけ母を想い、越えることのできない母の偉大さに感服している。

「本当にありがとう！ お母さん！」

昭和二十三年の冬に、中国服に身をつつみ内地へ帰還した兄は、旅順から内地までの空白の出来事を何一つ語ることをしなかったが、今になってみると、強引にでも聞いておくべきだったと後悔している。元来が無口な兄ではあったが、終戦を境にさらに一層無口になったようだ。勉強机のない私の為に、りんご箱にきれいな紙を貼り、本箱まで作ってくれた兄。苦しい生活の中から「質流れでごめんな！」と言って時計を買ってくれた兄。弟妹の父親がわりに、面倒を見てくれた兄。母の老後を看とった兄だったが、これも運命か、自分自身は脳梗塞で言葉を失い、最後まで無口のままに体をベッドに横たえて他界した。

享年七十二歳。お兄ちゃんありがとう！

あとがき

長兄が亡くなった翌年、私は悪性肉腫癌となり胃の三分の一を切除する二回の大手術を受けた。それから今日まで七年になったが、常に癌という

言葉におびえながらも病氣と共生しようと頑張っている。

今でも飛行場の大きな鉄の扉に、うつし出されるソ連兵の影、火葬にしたとき、私の足元へころがってきた妹の首などの夢に脅えながら、眠れぬ夜を過ごすこともある。

無蓋列車で見たあかね色の空、涙で唄った夕日の歌、埼玉の叔父の家で過ごしたつらく悲しかった生活、そして兄と手を取り泣きながら見たあかね色に染まった富士山。

八歳の目で見た戦中戦後は、あまりにも強烈に焼きついた記憶である。

二度と戦争を起こしてはならないと思う。